

教育心理学年報 第7集

学習と、パターン群の分類学習についての基礎的な研究を行なった。女子専門学校の学生に30時間学習させた結果、連合学習で音節適中率は最高56%であり、分類学習においても、話者の個人差が強く出てきて、音節の特徴による分類は困難であった。また誤りの質問分析からみて、学習時間を延長しても急速な上昇は期待できない。発語学習に役立たせるためには、学習方法に工夫を

加えねばならない。この発表に対し、ソナグラムがもっと単純明確に特徴的なものを示すように機械を改良する余地はないか、このような複雑な刺激を学習に使うことの可否が問題となり、ろう児の発語指導上興味ある研究として、活発な質疑応答が展開された。

(小柳恭治・松下 淑)

b 精神薄弱 I

610 精神発達遅滞幼児の行動診断の研究

—第2報—

(1) 行動診断の方法

○津 守 真 (お茶の水女子大学)

川 島 杜紀子 (日本総合愛育研究所)

水 田 順 子 ()

○西 山 恭 子 ()

○岡 本 明 子 ()

岡 田 十起子 ()

西 淑 (お茶の水女子大学)

611 /

(2) 行動診断の妥当性の検討 /

612 /

(3) 治療教育効果 /

613 就学時健康診断における精神薄弱の

発見とその問題点

○藤 島 岳 (東洋大学)

山 本 普 (明治学院大学)

飯 田 精 一 (社会事業大学)

614 精神薄弱児の記憶

—遡向抑制について (1)—

大日方 重 利 (東京教育大学)

615 精神薄弱児の学習

—言語的媒介の作用 (4)—

小 出 進 (千葉大学)

616 精神薄弱児の学習過程の研究 (3)

○氏 森 英 亜 (東京教育大学)

西 谷 三四郎 ()

堅 田 明 義 ()

大日方 重 利 ()

617 精神薄弱児の感覚運動系の機序

(3) 選択反応の問題

○茂 木 俊 彦 (東京大学)

山 際 一 郎 ()

内 山 武 治 (大阪大学)

伊 沢 秀 而 (日本女子大学)

618 精神薄弱児の類型化における

多変量解折の適用

○伊 沢 秀 而 (日本女子大学)

三 木 安 正 (東京大学)

山 際 一 郎 ()

I 全般の特徴

本部会の報告は、大きくわけて4つに分かれる。第1は、精神発達遅滞幼児の治療教育に伴う臨床的研究(610~612)である。第2は就学時における精薄児の発見に関する調査研究である(613)。第3は、精神薄弱児の心理学的特性に関する教育(614~617)である。第4は、精薄児の類型に関する研究である(618)。

討議は大たいにおいて活潑に行なわれたが、共通に精神薄弱の問題とはいえ、関心が多岐にわたっていて、焦点が定まらないうらみがあった。また、精神薄弱という語を用いても、被験者の特性はいろいろであり、その実体についての認識も、共通性を欠くうらみがあったのではないかと思われる。

II 討論の内容

津守他(610~612)の一連の研究は、精神発達遅滞幼児の行動診断に関する研究である。精神発達の遅滞を診断し、その発達指導を行なうのに、自由に遊びの場における行動観察にもとづいて診断する方法を考察、提唱し、その基礎資料を報告したものである。

藤島ら(613)の報告は、就学時の健康診断の際に、

精薄児の疑いありとされたものについて、さらに精密検査を行なった調査報告であり、一義的な結果は得られていないが、この種の研究は、今後一層検討を進められるべきものであろう。

大日方 (614), 小出 (615), 氏森ら (616) の研究は、いずれも精薄児の学習過程、とくに対連合学習の問題の分析を試みたものである。大日方 (614) は、数字と2音節無意味綴りの対連合学習 (10項) が挿入学習のおよぼす逆行抑制の問題を、挿入学習と原学習の類似度をパラメーターとして検討した。逆行抑制は同じ MA の正常児と比較してもなお精薄児で著しい傾向があり、挿入学習の類似度が減少する場合、および挿入学習から両学習までの保持インターバルが長い場合に正常児の水準に接近すると述べている。また、障害の内因性、外因性による成績の差はみとめ難いことも示した。氏森ら (616) の研究は、同じ対連合学習 (15項) の学習課題で集中法、分散法の効果を比較した、関連演題である。CA 平均 14 才、MA 平均 8.6 才の精薄児 15 名の集中、分散学習 15 試行の経過を、MA と CA で matching させた 2 群の正常児と比較したものであるが、一般に精薄児群では集中法がすぐれ、正常児群では分散法が有効であることを示している。ただし誤反応数は平均して精薄児群で有意に多く、学習方法のいずれをとろうとも正常児群のレベルに達することは期待できないとする。

精薄児の学習過程が同一 MA の正常児より劣ることについては、小出 (615) の報告でも同様である。小出の報告では、線画と色の組合せ 6 項からなる対連合課題の 15 試行までの学習経過を、言語的媒介の促進的、抑制的な面を考慮した (1) 自然な関係の対の場合と、(2) 反対色との対の場合について検討を加えた。この結果、学習の困難度は当然 (2) が高く、11 試行ではじめて (1) の水準に到達すること、この経過は MA が 2 才低い正常児群の経過と概ね一致することを述べている。実験が平均 MA 8.3 才の精薄児群と 6.4 才の正常児群の比較のみによっている点で、結論の第 2 の一般性にはなお疑問の余地が残されるが、学習経過に 2 才の開きを指摘したことは注目してよい。精薄児のこの学習低下を、小出は言語的媒介の機能の欠陥に帰因すると考えるが、言語的媒介に specific な欠陥のみを予想するだけでよいのか、一般的な学習能力の遅滞との関係はどう考

えるか、などの疑問が伊沢 (日本女子大) から提出された。

茂木ら (617) の報告は、感覚運動系の機序に関する同グループの一連の研究の一部として、精薄児の選択反応時間の特性を論じたものである。等確率 random に出現する赤・青 2 種類の光刺激を弁別して赤のみに押ボタン反応を与えるさいの選択反応時間と、赤色光刺激のみの random 提示系列に対する単純反応時間とを electronic counter により測定した。31 例の精薄児群と 39 例の正常児群の比較で、単純反応時間は MA 規定性をもち両群とも MA 軸に沿う同一単調減少曲線で回帰されるが、選択反応時間は、精薄児の成績が同一 MA の正常児群より 120~150msec 速いことを示している。選択反応時間にみられる両群の成績の差は、課題の処理メカニズムについての質的差異を示唆するものと考えられ、時系列現象に対する予測過程が導入される機序 (正常児) と、このような上位系による促進を含まない機序 (精薄児) の別に着目した。後者の場合、連合野過程としてはニューロンの短絡回路を用いることになり、反応時間の短縮が現われることも可能になる。なお神経生理学的データを含む詳細な分析を将来に期待したい。

最後におこなわれた伊沢 (618) の発表は、精薄児の類型化の問題に多変量解析を適用する試みを述べたもので、性格・行動特性に関する評定項目 214 について精薄児 191 例の資料を収集し、この資料に成分分析を適用して行動類型のための基準軸となる独立の成分を抽出した。抽出された成分は contribution の大きいものから順に、社会的成熟度、幼弱温順性、活動性興奮性、自閉的行動、固執的行動に関するもので、以上の第 5 成分までで行動特性の約 50% が説明可能であるとした。さらに第 3 成分までの直交 3 次元空間に 191 例を配置して、分類の予備的考察を加えている。類型・判別の数理モデルとしては多重判別函数を適用する方向なども残されるが、精薄児の類型的諸問題に対する体系化の方法論として関心を呼んだ。モデルの適用範囲として、“行動的資料に限定せず病因・身体症状を加えた議論をすすめるべきではないか” という山本 (明治学院大) の意見が述べられたが、まったく異論がないとの解答があった。

(津守 真・伊沢秀而)